

【資料紹介】長崎県長崎市東上遺跡出土の大形成人用甕棺

古門 雅高

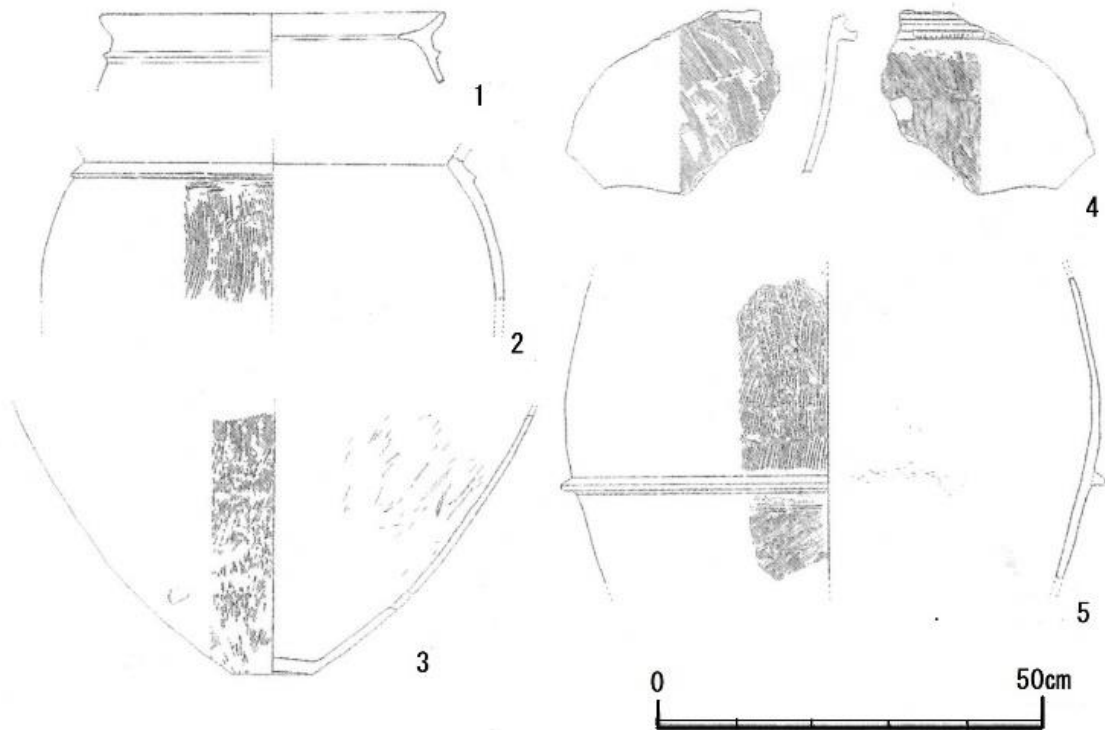
はじめに

長崎県長崎市三重（みえ）地区の東上（ひがしあげ）遺跡より、大形成人用甕棺が出土している（註1）。『新長崎市史』によると、現在長崎市内で発見されている唯一の成人用甕棺であるという（長崎市史編纂さん委編 2013）。本稿では、既に同市史で紹介されている内容をもとに、あらためて、この甕棺の重要性を再確認し、歴史的評価を行う（註2）。

なお、当該遺物は現在、長崎市文化観光部文化財課が管理する長崎市松が枝町の埋蔵文化財整理室で保管されている。

1. 甕棺発見の経緯

『新長崎市史』によると、これらの遺物は「平成11年（1999）下水道管敷設工事の立会いの際に、かく乱土中（過去の管工事の埋戻し土）より採集され」た資料である（長崎市史編纂委編 2013：pp. 383-384）。



第1図 東上遺跡出土土器 (S=1/10)

2. 東上遺跡の地理的・歴史的環境



第2図 本稿関係遺跡



(グーグルアースより)

第3図 東上遺跡位置



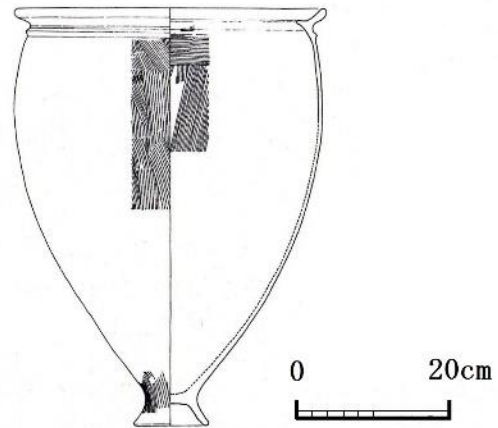
第3-2図 東上遺跡の範囲および墓棺出土地点（挿図および遺跡範囲は渡邊康行氏による）

3. 甕棺の概要 (第1図)

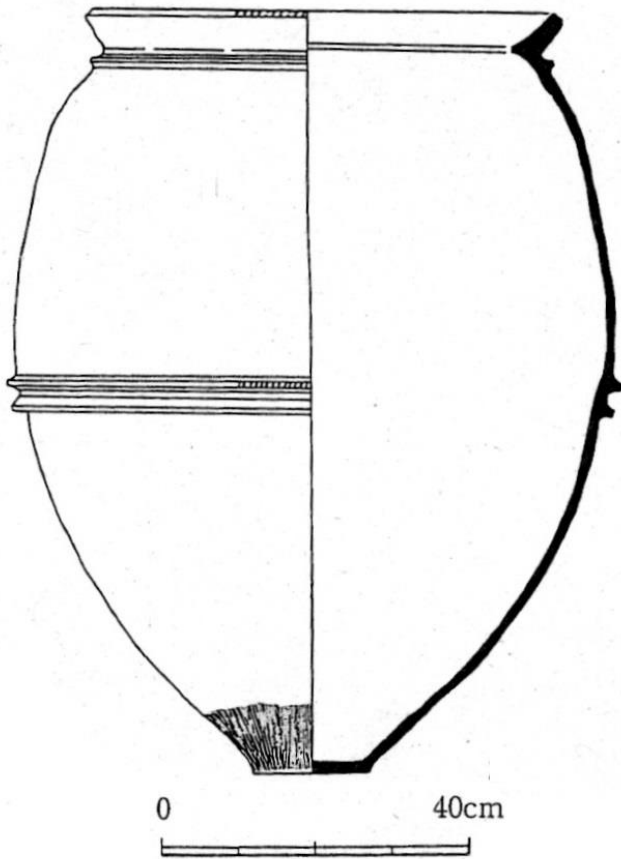
1は復元口径約44㏍、残存胴部径は復元で約46㏍、残存器高は同約10㏍の甕形土器の口縁部片である。口縁部上面が窪んでいるのが特徴である。口縁部下に断面三角形の突帯が一条めぐる。

2、4、5は胴部片である。2の残存部最大径は復元で約60㏍、残存器高は同18㏍、頸部復元径は約49㏍である。4は二条の突帯を有し、うち一条は刻目を施す。5は復元胴部最大径約70㏍、残存部の復元器高は約39㏍である。断面「コ」の字形の突帯が一条めぐる。2の頸部から口縁への屈曲部の形態は、1のそれとは異なっており、両者が同一型式ではないことが分かる。

3は底部片で、残存部の最大径は復元で約67㏍、残存器高は同33㏍である。底部の形態は若干上げ底気味の平底で、底部から胴部への立ち上がりに、くびれはない。



第4図 梅ノ木遺跡の黒髪式土器 (S=1/10)



第5図 吉ヶ浦遺跡出土K28 甕棺 (S=1/10)

4. 甕棺の検討

(1) 類例と型式

1は黒髪式土器様式のいわゆる「しゃくりあげ」の形状の口縁部に類似する(註3)。北部九州系の甕棺とすると、橋口編年のKIV a式として例示された吉ヶ浦 K28 甕棺に似る(第5図)。しかし、吉ヶ浦 K28 例は口縁内側の突出が東上例ほど顕著ではなく、橋口がKIV a式として例示した同じ吉ヶ浦遺跡の甕棺には、目立った突出部も口縁部上面の窪みもない(第8図)(橋口 1979)。

筆者は東上遺跡から出土した1は、口縁部上面に窪みあるいは内湾が見られること、口縁内側の突出あるいは突起が顕著であること、さらに残存した胴部の形状からみて、胴部がさほど丸味を帯びないことなどから、黒髪式土器の脚台付きの甕形土器と判断する。類例としては熊本県菊陽町梅ノ木遺跡出土の甕形土器がある(第

4 図) (西 1982)。同土器は口径約 40 ㍉、器高約 54 ㍉、胴部最大径約 40 ㍉の単棺で、口径は東上遺跡例よりやや小さいものの、ほぼ同型式であると推定する。また口縁部先端が膨らむのは、後出する属性である。同土器は田崎博之分類の K5 ないし K6 (田崎 1998)、中園聡分類の口縁部 C6 (中園 2004)、西健一郎編年の黒髪三式ないし四式 (西 1983) に相当すると考える。

次に、胴部と底部を検討する。**2** の頸部と胴部の境の形状は、富の原遺跡 B 地点 20 号甕棺 (橋口編年 KIV a 式併行) に類似し (第 9 図)、**3** の底部が若干上底気味である特徴は、同遺跡 A 地点の 4 号甕棺 (橋口編年 KIV b 式併行) に類似する (第 11 図) (註 4)。**4** の胴部片は、二条突帯を有し、下位の突帯に刻目を施しており、同遺跡 A 地点 2 号甕棺 (橋口編年 KIV a 式併行) (第 10 図)、同 B 地点 20 号甕棺 (第 9 図) に見られる。**5** の一条突帯の断面形状は、同じく同遺跡 A 地点の 4 号甕棺 (第 11 図) に類似する。

したがって、東上遺跡採集の甕棺は、富の原遺跡 A 地点および B 地点の甕棺群と類似し、型式としては橋口編年の KIV a 式から KIV b 式、森編年の桜馬場式となるであろう。大きさも **2** の復元頸部径や **5** の復元胴部最大径から推し量って遜色はなく、同程度と考えられる (第 1 表) (註 5)。

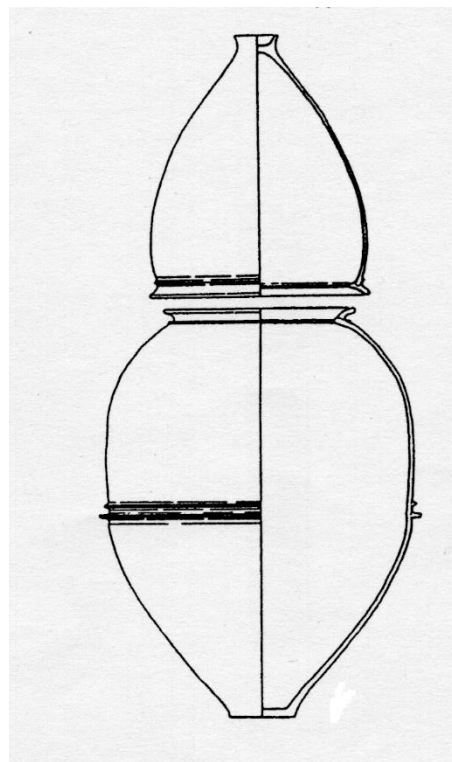
また、東上遺跡の甕棺片の接合関係は、実見の結果、ハケの条線の間隔が等しく、同一工具による調整と推定されることや、断面観察による胎土の観察、明暗はあるものの外面の色調の共通性などから、**2, 3, 5** は同一個体と判断した。**1, 4** はそれぞれ別個体で、**2, 3, 5** と異なることが分かった。

(2) 東上遺跡出土甕棺の復元

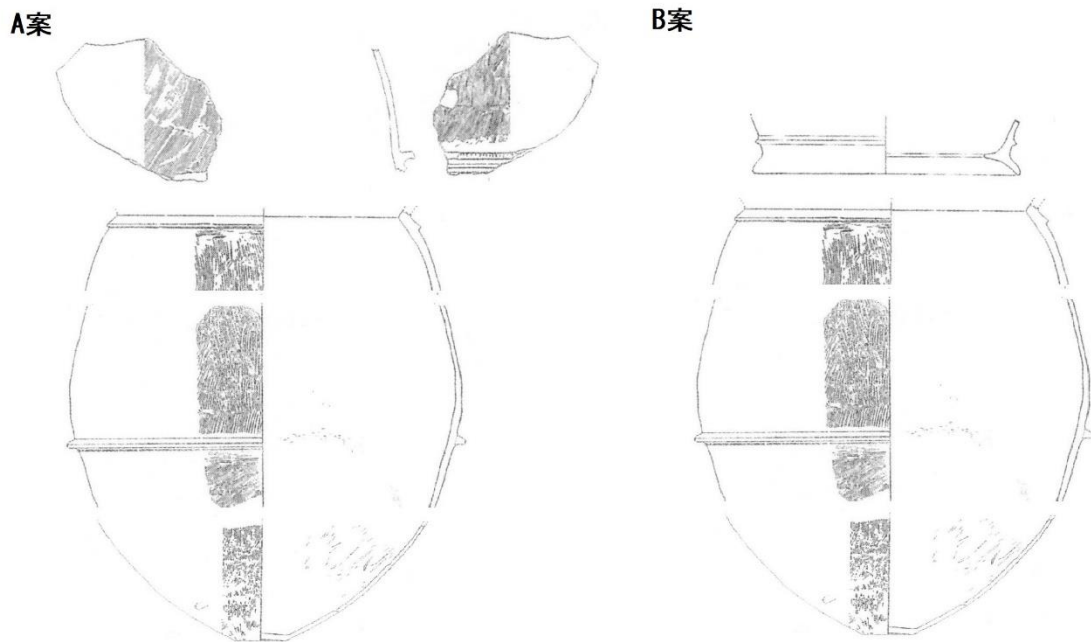
次に東上遺跡の甕棺はどのような姿として復元できるか検討する。まずは単棺の可能性があり、さらに組み合わせの甕棺の可能性もある。

仮に、組み合わせの甕棺とした場合は、2つの案が考えられる。ひとつの案は富の原遺跡 A 地点 4 号甕棺 (第 11 図) のように、**2, 3, 5** と **4** が組み合う甕棺と復元するもので、A 案とする。もうひとつの案は **2, 3, 5** に **1** の黒髪式土器様式の台付甕が組み合う甕棺と復元するもので、B 案とする。(第 6 図)。

試みに、東上遺跡出土の甕棺を『新長崎市史』に掲載された図をもとに A、B 2 案に復元したものが第 7 図である。あくまでも概念図であるが、全体の印象を窺うことができる。B 案の類例としては、第 6 図に示した熊本市新町遺跡の甕棺がある。東上例と比較すると、下甕の底部から胴部の立ち上がりにくびれを持っており、型式学的には古相と言えよう。西健一郎はこの甕棺を中期末としている (西 1982)。



第 6 図 熊本市新町遺跡甕棺
(縮尺不明)



第7図 東上遺跡出土甕棺の復元案（縮尺不同）

表1 東上遺跡の甕棺と富の原遺跡の甕棺の法量比較

部位\甕棺	東上遺跡	富の原遺跡出土大形成人用甕棺			
		A地点2号	A地点4号	B地点16号	B地点19号
頸部外径	48	35	40	41	39
胴部外径	69	65	71	65	68.5
底部外径	10	10.1	12	12	12
威信財	-	鉄戈	鉄戈	鉄戈	鉄剣

6. 東上遺跡出土の成人用甕棺の相対年代

これまでの検討の結果、東上遺跡から採集された甕棺は、富の原遺跡で威信財である鉄戈や鉄剣を出土した甕棺に類似し、北部九州系の甕形土器が組み合ったとするA案と、黒髪式土器様式の脚台付き甕形土器が組み合ったとするB案が想定される。

なお、先に記したように、それぞれが単棺であったことも考えられ、C案とする。甕棺の型式としては、下甕はA、B案ともに橋口編年のKIV a 式からKIV b 式、森編年の桜馬場式併行となる。従来の相対年代では中期末から後期初頭である。

B案の上甕である図1の1は田崎の黒髪式土器中段階から新段階（田崎 1998）、中園の黒髪Ⅱ式（中園 2004）、西の黒髪三式ないし四式で（西 1983）、いずれも須玖Ⅱ式土器併行である。従来の相対年代では、中期後半となる（註6）。

7. 東上遺跡出土の成人用甕棺の歴史的意義

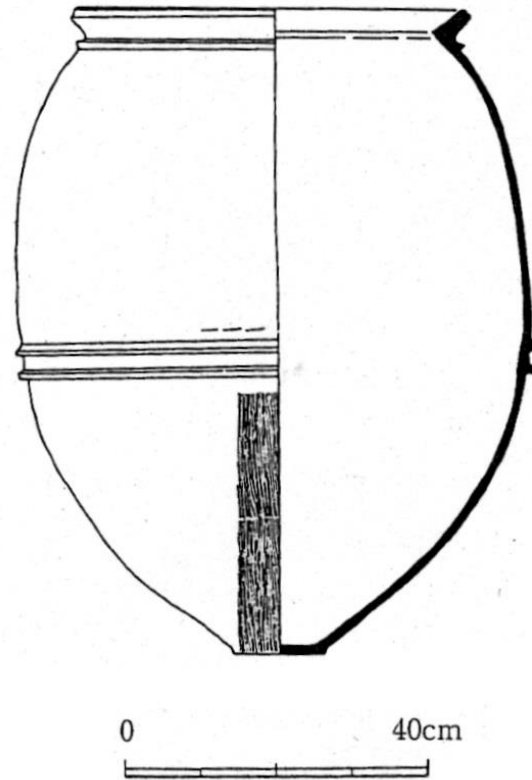
筆者は以前、本県本土部の大型成人用甕棺を中型甕棺も含めて「大形成人用甕棺」と総称し、その分布が地域的にも時期的にも偏在することを示した（古門2019）。具体的には、弥生時代前期に五島列島・平戸諸島に分布していた大形成人用甕棺が、中期初頭には田平・松浦の地域に分布が移動し、中期中頃から後半は島原半島地域に移り、そして中期末には大村地域に分布することを明らかにした。さらに、それはあたかも有力集団が交替しているかのような様相を呈すると主張し、その背景には貝の道の経路変更が影響したと推定した。

木下尚子の研究により、弥生時代の南海産の貝の交易ルートである「貝の道」に象徴される北部九州から南西諸島を結ぶ海上ルートが、弥生前期の九州西岸の外海ルートから、中期後半には有明海を介した内海ルートに移動したことが分かっている（木下1996）。筆者は本県本土部における大形成人用甕棺の分布の移動は、この貝の道のルートの移動が反映されたものと考えている。

さらに筆者は、本稿で紹介した東上遺跡の大形成人用甕棺が、中期には一旦衰退したとみられたかつての「貝の道」の主要ルートである外海ルート上にあることに注目したい。中期末に存在する東上遺跡採集の甕棺と同時期の主要遺跡には大村市の富の原遺跡があり、威信財である鉄戈などを副葬した大形成人用甕棺が出土している。中期末に、大形成人用甕棺が、本県本土部では大村湾という内海に面した富の原遺跡と、角力灘（すもうなだ）という外海に面した東上遺跡にのみ分布していることは、想像をたくましくすれば、富の原遺跡の有力集団が外海へ出る際に、早岐瀬戸とともに、東上遺跡がある三重地区を利用していた可能性が考えられる。さらに、その中継地が大村湾西南岸に位置し、東上遺跡と同時期の遺跡が確認されている時津町の前島（まえしま）遺跡とみることもできよう（時津町教委編1991、同1994）（註7）。併せて東上遺跡が海民の活動地域であるスカ（西彼杵・長崎半島西岸）に位置することから、海民の掌握も背景にあったのではないかと推定する。

以上の推論を歴史的事実とするためには、更なる根拠が必要であるが、そのためにも今後の長崎市三重地区の考古学的調査の進展に大いに期待したい。

以上のように東上遺跡の大形成人用甕棺は本県本土部の弥生時代中期および後期の社会復元を行う上で、きわめて重要な資料であり、今後とも新たな歴史的評価を受けるべき資料であると確信す



第8図 吉ヶ浦遺跡の甕棺(S=1/10)

る。

本稿の執筆にあたっては、大庭孝夫、宮崎貴夫、渡邊康行各氏から助言をいただいた。また、東上遺跡の甕棺の実見にあたっては、長崎市文化財課の宮下雅史、田中 学両氏にお世話になった。それぞれの芳名を記し、感謝申し上げる。

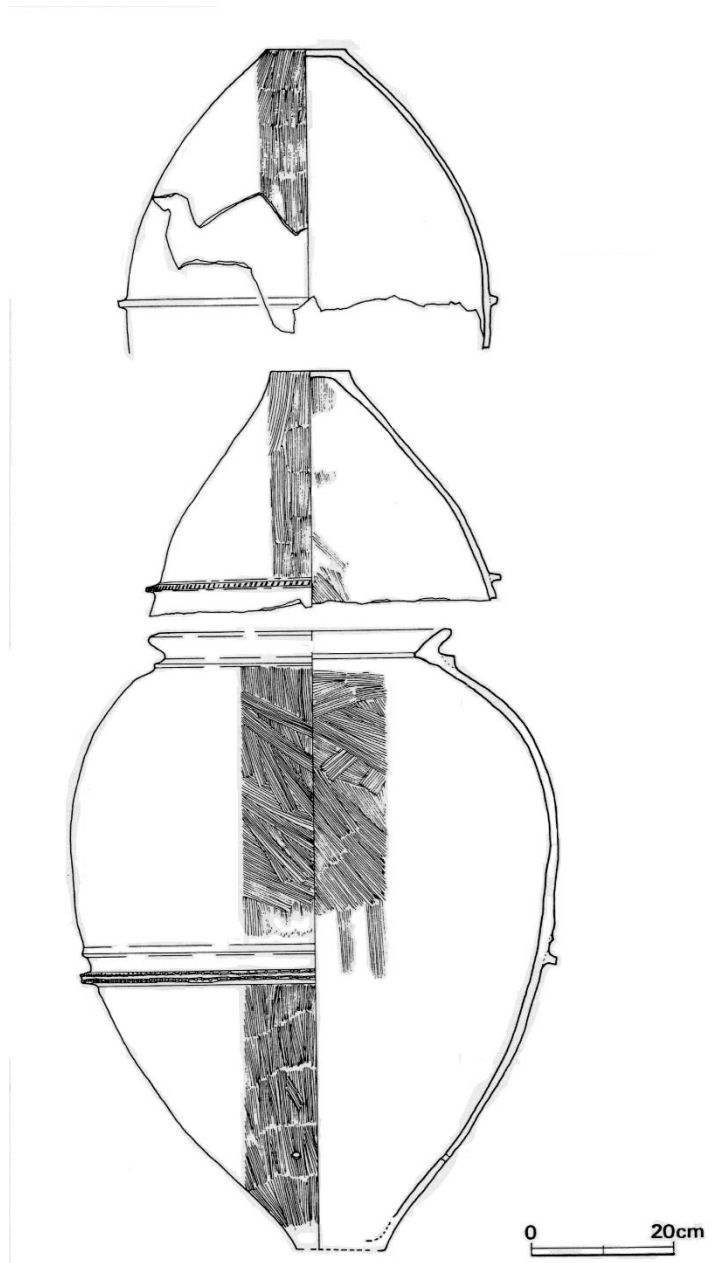
【註】

註1 本稿では速水信也の分類基準に従い、器高 78 ㍉以上の甕棺を大型甕棺、器高 61 ㍉以上の甕棺を中型甕棺とする（速水 1985）。

さらに両者を合わせて「大形成人用甕棺」と呼称する。

註2 東上遺跡では甕棺の他に、別地点で発見された箱式石棺墓に広口壺形土器と樽形甕が副葬されており（長崎市史編さん委編 2013）、新長崎市史ではこれらの土器を須玖 I 式としている。広口壺は中園聡分類の壺 A1 型式で、須玖 I 式古段階および新段階に編年される。樽形甕は中園分類の 1 型式か 2 型式で、須玖 I 式新段階から出現するという（中園 2004）。したがって、ここでは中園編年に従い、この箱式石棺墓の時期を須玖 I 式新段階併行とする。

註3 本県の黒髪式土器様式の甕棺については、上田龍児の検討がある。上田は島原市景華園遺跡の甕棺を整理した際に、自ら設定した在地系の景華園 VII 式

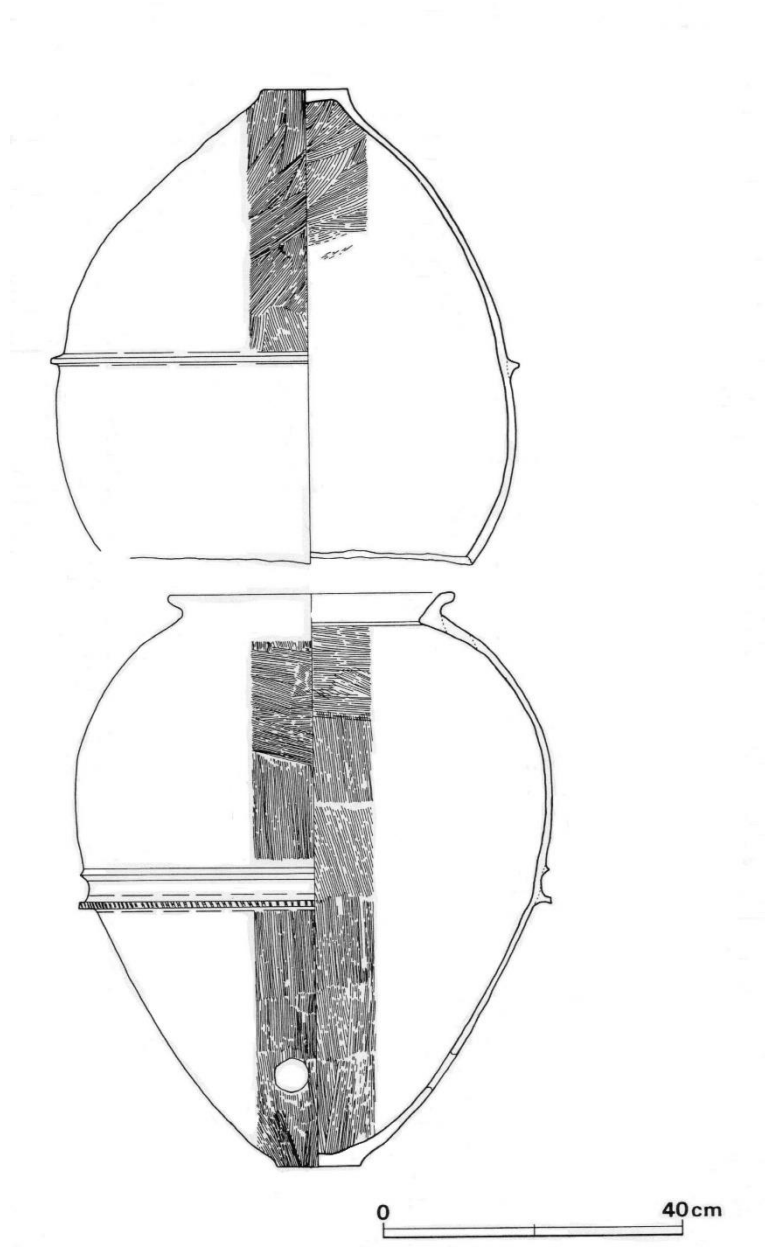


第9図 富の原遺跡B地区出土第20号甕棺 (S=1/10)

甕棺（森編年の立岩式新）、橋口編年のKⅢc式併行）をさらに細分し、「口縁部がT字形のもの」をⅦaとして位置づけ、「口縁上面をしゃくりあげるもの」をⅦbとしている（上田2004:p.54）。上田はⅦaの口縁部を窪ませる形態にも黒髪式土器の影響をみている。

註4 富の原遺跡の甕棺の型式認定は宮崎貴夫氏から教示を受け、東上遺跡の甕棺との類似点についても示唆をいただいた。

註5 ただし、現在、橋口編年のKⅣ式や森編年の桜馬場式をめぐるのは、その内容や相対年代が学界でも議論となっており、一定の整理を経ないと、安易に使用できない現状がある。すべては、2007年から2008年に唐津市教育委員会によって行われた桜馬場遺跡の第3次調査によって、1944年（昭和19年）の防空壕掘削の際に発見され、その後埋め戻されたため、実態が不明であった甕棺（「宝器内蔵甕棺」と呼ばれる）が発見されたことから始まる。



第10図 富の原遺跡A地区2号甕棺 (S=1/10)

桜馬場遺跡の甕棺は桜馬場式甕棺の標式であったが、再発見された「宝器内蔵甕棺」は、これまでの桜馬場式甕棺のイメージとは異なる形状のものであった。その後、この甕棺は蒲原宏行によって型式学的な検討が加えられ（蒲原2009）、さらには渋谷格により桜馬場式の内容の整理・再検討が行われた（渋谷2016）。本稿では、橋口編年KⅣ式および森編年の立岩式・桜馬場式さらには三津式に係る研究成果は、渋谷の見解を参考にして記述している。渋谷は、蒲原の「宝器内蔵甕棺」の型式学的検討結果を踏まえ、橋口編年のKⅣa式とほぼ同じ内容と認識されていた桜馬場式甕棺を、橋口編年KⅣa式より新しい型式とみている。そのことによって渋谷は、桜馬場式という型式その

ものの再検討が迫られているという認識に至った。

さらに同氏は橋口編年のKIV式の細分であるKIV a式、同 b式、同 c式は、型式的差異があいまいな点があることを指摘し、従来の桜馬場式という型式名を棚上げして、橋口編年のKIV a式およびKIV b式を立岩式に包括させることを提唱した（渋谷 2016）。

このことを渋谷は、かつて高倉洋彰が桜馬場式と三津式を統合させ、一の谷式を設定したことと「基本的に同じになった」としている（渋谷 2016： p540）。

以上のような渋谷の見解が筆者のKIV a式や桜馬場式に対する認識となっている。

註6 黒髪式土器の研究状況を筆者が理解するところでは、黒髪式土器の所属時期は、大きくは①中期後半、②後期前半、③中期後半から後期初頭の諸学説があつて、現在に至っていると言えよう。

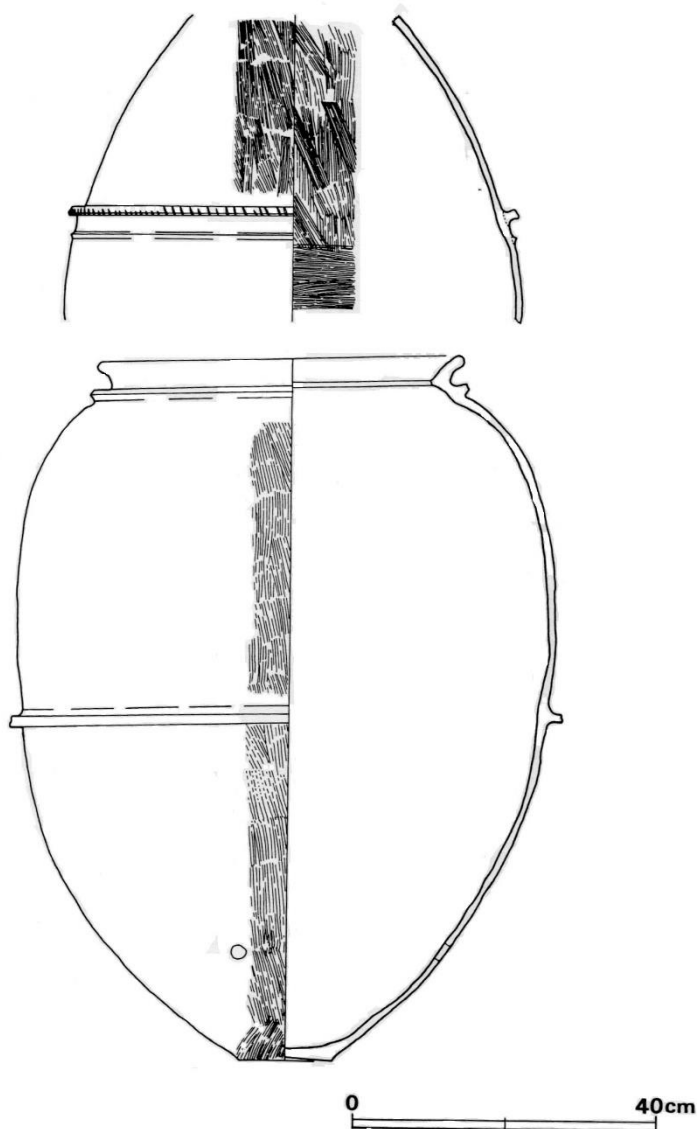
現在では、黒髪式土器の大半は弥生中期に属するという共通認識ができてきているように思えるが、問題は熊本の後期初頭の土器が中期的な様相を残していることから、それらを黒髪Ⅱ式として「黒髪式」の様式名を用いるか、新たに「罌式」などのような様式名を冠するかの相違がある。

同じような問題は、本県本土部の後期初頭の土器を考える際にも生じるものである。

なお、清田純一も熊本県城南町宮地丘陵の弥生遺跡の整理の際に、「罌式」という様式名を用いている。しかし、清田は「中期後葉後半に位置づけられる土器」として用いており、この点が西とは異なる（清田 1991 p. 274）。

また、田崎博之や中園聡は罌式を弥生後期初頭と位置付けている（田崎 1998、中園 1996）。

註7 前島遺跡では、須玖式土器併行期の箱式石棺墓5基が調査されている（時津町教委編 1991、同 1994）。



第11図 富の原遺跡A地区4号甕棺 (S=1/10)

【引用・参考文献】

- 上田龍児 2004 「(2)景華園遺跡出土甕棺の位置付け」『長崎県・景華園遺跡の研究、福岡県京都郡における二古墳の調査、佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学人文学部考古学研究室
- 大村市教委編 1987 『富の原』大村市文化財調査報告書 第12集 大村市教育委員会
- 鏡山 猛・乙益重隆 1969 「弥生文化各説一九州」『新版考古学講座』第4巻 原始文化<上> 雄山閣
- 蒲原宏之 2009 「桜馬場「宝器内蔵甕棺」の相対年代」『佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』佐田茂先生論文集刊行会
- 木崎康弘 1996 「弥生時代後期土器群の編年学的研究」『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告 第158集 熊本県教育委員会
- 木下尚子 1996 『南島貝文化の研究』貝の道の考古学 法政大学出版局
- 清田純一 1991 「肥後における弥生時代遺跡の一様相」『交流の考古学』三島格会長古稀記念 肥後考古第8号 肥後考古学会
- 熊本県教委編 1997 『庵ノ前遺跡Ⅲ』熊本県教育委員会
- 佐藤伸二 1996 「黒髪式土器」『日本土器辞典』雄山閣出版
- 渋谷 格 2016 「桜馬場式のゆくえ」『考古学は科学か』田中良之先生追悼論文集 田中良之先生追悼論文編集委員会
- 武末純一 1982 「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 田崎博之 1998 「IV九州系の土器からみた凹線文系土器の時間的位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7年度～9年度科学技術研究費補助金（基礎研究B）研究成果報告書
- 時津町教委編 1991 『前島古墳群』時津町文化財調査報告書第1集 時津町教育委員会
- 時津町教委編 1994 『前島古墳群Ⅱ』時津町文化財調査報告書第2集 時津町教育委員会
- 長崎市史編さん委員会編 2013 『新長崎市史』第1巻 先史古代編、中世編 長崎市
- 中園 聡 1996 「弥生時代中期土器様式の併行関係：須玖Ⅱ式期の九州・瀬戸内」『史淵』133号 九州大学文学部
- 中園 聡 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』9 人類史研究会
- 中園 聡 2004 「第4章 土器の分類・編年と様式の動態」『九州弥生文化の特質』九州大学出版会
- 西健一郎 1982 「熊本県における弥生中期甕棺編年の予察」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 西健一郎 1983 「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』第12集 九州古文化研究会
- 橋口達也 1979 『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告』31 福岡県教育委員会 後に『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣 2005収録
- 速水信也 1985 「横隈狐塚遺跡Ⅱ区出土甕棺の変遷」『横隈狐塚遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第27集 小郡市教育委員会
- 古門雅高 2019 「大形成人用甕棺墓分布周縁地域の社会」『西海考古』第11号 西海考古同人会